おじいさんはがんこ者

監督　堀内甲

農村の映画はとかく暗くなりやすい。ところが今の農村は、都会の文化がすぐに入ってきて、私どもの眼を驚かせるような現象が甚だ多い。都市と農村の文化は平均化されつゝある。また、農民の素天性、高つ調子、痛烈な皮肉なども見落されがちだ。このようないわば「今どきの農村」の一面を食生活改善に焦点を合わせ乍ら思い切って明るく描いてみた。これはこれで楽しい仕事だった。

解説

桜映画社では「さよならかとはえさん」「今どきの嫁」等、農村を舞台にした作品も比較的多く製作して参りましたが、今度食生活改善をテーマにした短編喜劇映画「おじいさんはがんこ者」全三巻を、全国のご家庭に贈ります。

我が国では栄養欠陥から起る病気は四人に一人の割で、中でも白米食の欠陥が注意されてきております。とくに栄養の欠陥は農村に多く、男女別では女子の方が悪いといわれ、農家の婦人は三人に一人は栄養欠陥を起しています。

近ごろでは食生活の改善という言葉がしば〳〵聞かれるようにはなりましたが、食事は長い間の習慣、経済などにつながり、又農家では自家生産の面とも関連して考えていかなければならず、一口に食生活改善といっても容易なことではありません。

しかし、農村の人たちには、台所を改善することにより、風呂場を直すことより、無視されがちな食生活の改善が一番大切なことだと思います。それは健康を守る一番大きな力なのですから、

食生活改善をテーマにした劇映画は、おそらくはじめてで、従ってとまどまな問題にふれながら、比較的無関心な農村の人びとも楽しく笑いながら関心を抱けるようにと心掛けました。

ストオリイ

清々しい農村の朝。

山村家では家族一同があつまって野良仕事に出る前の朝飯を食べています。家長のおじいさんを中心に、息子のおとうさん、嫁のおかあさん、孫のちかちゃん、孫の哲ちゃんといつちゃん。みんな黙々と、まるで食べる競争みたいです。

農家では、大根の季節、ナスの季節、菜っ葉の季節と、そのときどきの獲れ秋のものが、煮っけにもなれば、漬物にもなれば、汁の実にもなります。今はキャベツの季節です。こういうのを、ばっかり料理といゝます。そして白い御飯を腹一ぱい食べます。これを、どっさり食事。ばっかりを、どっさりというわけです。

食事のさなかに、ちかちゃんの許婚の文治が麦刈の手伝にきます。そして、おじいさんに、若い者はうんと食ってうんと働くんだといわれると、朝飯を食べ直すという、おじいさんには気のおけない未来のおムコさんです。

今日も一家総出で麦刈に忙しい。

そこへバスが停って、お母さんと同級生で近くの町の医者に嫁いでいる直子が降ります。お母さんは鎌をほうり出して駆け寄って大げさに手をとりあうのです。町で暮す直子は会うごとに若いように思われます。お父さんも仕事の手を休めて見とれるぐらい。

その夜、お母さんがちかちゃんと一緒に直子の実家へ話しに行くと、農村の人が老けやすいのは、過労もあるけれども、それ以上に白米の食べすぎによるものらしいといわれます。

女にとってこれは最大のショックです。お母さんとちかちゃんは申合せて、その翌日は早目に野良からあがって、栄養食の混ぜ御飯を作りました。ヒジキや油揚げや野菜を入れて。

これが、おじいさんのゲキリンにふれます。こんな牛の飼い葉みたいなもの、五杯も六杯も食えるか。いや、そんなに沢山食べられないからいいんだ。と、遠慮のない痩のちかと子との間にチョウ〳〵ハッシの口論となりました。

おじいさんの主張は、百姓というものは旨分のところでとれたものを腹一ぱい食べればいいんだ。栄養とか何とかいって、油だ、魚だと買うのはゼイタク千万な話でしかありません。

やがて、猫の手も借りたい田植がはじまります。ちかこたちは、意地づくで、コッペパンに栄養のあるものをはさんで、山羊の乳とシャレこむが、なれないので腹のおさまりが悪い。おじいさんは白い握り飯を頑張ってゆう〳〵たるものです。

ところが、野上りの祝の日に、おじいさんは過労と白米ばかりの大食のため血圧があがって、御自慢のタイルの風呂場でフラ〳〵っと倒れてしまいました。大事にはいたらなかったけれども、腹の底ではちょっとは考えたのでしょうね。

野上りをねらって、町の保健所の宣伝カーが、村の神社の境内で栄養料理講習会を開くと、おじいさんもふら〳〵と顔を出します。

美人の栄養士が、三色栄養の説明からはじまって、白米の欠陥をつくと、ナットクできないおじいさんはつい口をはさむ。お母さんや、ちかちゃんが、おじいさんのソデをひっぱるが、おじいさんは黙をまません。

頭のいい栄養士は一歩退却して、強化米の宣伝をはじめる。白米の最大の欠陥であるビタミンB₁を補った強化米入りの白い御飯の試食をすすめられると、さすがのおじいさんも皆の手前尻ごみする。そのときつかつか出て箸をとったのは文治です。

ちかちゃんは顔を真赤にしたり、やがて腹の底から頼もしくなったりで、文治の牡牛のような実行力の前に、口さきだけの自分の八木上りが反省させられました。

「私たち、結婚したら、小さな畑を一枚まかせてもらって、いろ〳〵な野菜の計画栽培をしましょうよ」

「ばっかり、どっさりは追放だ」と若い二人は誓いあうのでした。

やがて、村道を行く、婚礼の行列の中で、花嫁のちか子はつきそいの父（おじいさん）に「長湯とそれから大めしに気をつけてね」というと、じいさんは文治にもよくいっとけ、と切り返して、行列は朗かな大笑い。

（上映時間二十九分）

スタッフ

製作　村山英治
脚本　村山祐治　勝目貴久　窪川健造
監督　堀内甲
撮影　荒牧正甲
照明　永井俊一
音楽　渋谷修
録音　清島竹彦
編集　岸富美子
製作主任　湊保
協力　長野県屋代町　南信農業協同組合

キャスト

おじいさん　松本梁升
お父さん（長男）　永井玄哉
お母さん（君子）　中村美代子
ちか子（お父さんの妹）　西章子
哲ちゃん（十才）　松本栄藏
いつ子（七才）　中鉢昭子
直子　桜井良子
文治　千北栄二
美しい栄養士　岸旗江
セールスマン　利根司郎
山羊の声　七尾伶子

母と子の
桜映画社